

令和8年度 第1回野洲市農業振興計画振興委員会 議事録要旨

●開催日時

令和8年6月8日(月)午前10時～正午

●開催場所

野洲市役所本館 2階 第5会議室

●出席委員 (11名)

淡路委員、立入委員、天野委員、高谷委員、辻委員、岡田委員、木村委員、東委員、井狩委員、東郷委員、河村委員

●欠席委員 (1名)

藤岡委員

●事務局

櫻本市長 (途中退席)、中塚環境経済部長、西野環境経済部次長、
(農林水産課)

高田課長、加々爪課長補佐、岡田課長補佐、大根田主査、亀井主事、谷口農業推進員

●傍聴者 なし

○開 会

○市長挨拶

○自己紹介

○委員長・副委員長の選任

— 委員長に淡路委員、副委員長に立入委員を選任 —

○議事

(1) 会議予定

(2) 野洲市振興計画の改訂

(3) 意見交換

— 資料2を基に会議予定の説明 —

— 資料3を基に計画改訂の趣旨と計画の位置づけを説明 —

— 第3次野洲市農業振興計画冊子を基に中身の概要を説明 —

— 資料4を基に第3次計画の指標と進行管理について説明 —

(委員) 乾田直播の拡大は省力化に有効である一方、除草剤の使用が必要となり、環境こだわり農業を掲げているが矛盾していると感じる。また、大豆についても、病害虫の発生により農薬を使わなければ収穫できない状況があり、収益確保との両立が難しい。

(委員長) 乾田直播は稲作の効率化に必要な技術である一方、雑草対策問題が生じる。滋賀県の環境こだわり農業は全国的にも厳しい基準であり、生産力の維持と環境に大きな負荷をかけているわけではないという理解の醸成をどのように進めるかが重要である。

(委員) 担い手農家の作業効率化を進める中で、乾田直播や多収品種の推進を行っているが、多収品種は農薬や肥料の投入が必要となり、推進しづらい面がある。有機農業についても、コストや除草管理の負担が大きい。学校給食向け野菜についても、入札制度の影響で地元産が採用されにくい。

(委員長) 有機栽培は政策目標のひとつであるが、付加価値の確保が難しい。効率的な大規模生産と有機栽培をうまく組み合わせることが必要である。また、学校給食は食育の観点からも重要であり、地元産を使う仕組みづくりが必要である。

(委員) 野洲市は生産と消費が近く、地元の業者による加工や地場産業との連携によって、地元産農産物の消費拡大を進めることが必要である。

(委員長) 野洲市は交通の要衝でもあり、食品加工業者も多いことから、地域の強みをもっと活かすべきである。

(委員) 水田野菜作付面積拡大について、令和7年度実績の6.95haから、5年で15haの目標に届くのか。

(事務局) ブロッコリーやニンニクを中心に少しずつ面積は増えているが、15haはかなり厳しい。とはいえ、水稻・麦・大豆に加えて園芸品目を入れる複合経営を進め、経営安定を図っていききたい。

(委員長) 滋賀県は米に偏った農業構造となっており、水田野菜をどう位置づけるかが課題となっている。面積だけでなく売上なども含め、目標設定の工夫が必要である。

(委員) 国からは転作で麦大豆以外の畑作物を増やす方向が示されている中、作付指導や営農指導の体制をどう充実させるのか。

(委員長) 市町には専門人員が少ないため、JAや県と連携しながら産地づくりを進めるコーディネーター機能が求められる。

(事務局) 市には専門の人員が少なく、農業推進員が1人いるが、JAや県の普及員にお願いしながら指導している。市・県・JAの3者で戦略推進会議を行い、ブロッコリーやニンニクなどの戦略作物について、作付や販売の方向性を毎月協議している。

(委員長) 生産指導と販売先の確保をセットで考え、野洲産としてのブランド化につなげることが重要である。

(委員) 滋賀県は果樹産出額が少ないが、野洲市でもイチジクなどの産地化に取り組みたいという話も聞いており、果樹振興も大事だと思う。

(委員長) 果樹は魅力的な分野であり、滋賀県は後発の利を生かし、地域に合った栽培方法や販売戦略を検討できる可能性がある。

(委員) 水田野菜作付面積や耕作放棄地が減ってきているが、野洲市では開発も進んでいるからではないか。農地を守ることと開発の関係の中で、目標設定をどう考えるのか。

(事務局) 圃場整備されたところは優良農地と考えており、開発はできるだけ認めたくないが、政策判断としてやむを得ない場合もある。

(委員) 農地を守るという共通認識を持つ必要があり、面積だけでなく割合で示す方が実態を把握しやすいのではないか。

(委員) アセットマネジメントについて、誰が管理しているのか不明な施設があるため、実態調査が必要である。

(委員長) 現場で気付いたことをすぐに伝えられる窓口の整備も重要である。

(委員) 担い手への農地集積は進んでいるが、集約化が十分でない。低コスト農業やスマート農業を進めるには、大区画化や畦畔撤去など圃場条件の改善が必要である。

(委員長) 大区画化は有効だが、地域や地形によって適正規模は異なるため、地域に応じた対応が必要である。

(委員) 環境こだわりの取組面積拡大と化学農薬低減は整理できるのではないか。有機栽培やオーガニックは指標として残してほしい。

(委員長) 市民に分かりやすい計画とするため、環境こだわりや有機栽培の意味を明確に示す必要がある。

(委員) 野洲市は農業のアピールが弱く、特産品づくりや産地育成を進めることで、情報発信や食育、ふるさと納税にもつながる。

(委員) 生産はできても販売が難しいため、直売所や販売専門の仕組みが必要である。

(委員) 野菜の販売先が野洲や近郊にあれば、運送費の負担も減り、学校給食にも活用できる。

(部長) 市長はさざなみホール周辺を販売拠点にしたい考えを持っており、計画への位置付けは可能である。

(委員長) 販売拠点は道の駅型か町中型かで性格が異なるため、地域のニーズに応じた検討が必要である。

(委員) 低コスト農業には受け手が必要であり、農地の大区画化やスマート農業は重要である。

(委員) 野洲市の地理的条件を踏まえると、野菜の特産品づくりには難しさもあるが、知恵を絞って取り組みたい。

(委員) 農業で生活していくことが難しくなっているため、希望を持てる農業となるよう計画を進めてほしい。

(委員) 給食センターの食材について、地場産を優先できる仕組みが必要である。

(委員) 産地育成や特産品づくりが、さまざまな課題の解決につながると感じた。

(委員長) 振興計画は多様な意見を踏まえて作成するものであり、今後も意見交換を重ねながら、野洲市の利点を生かした農業のあり方を検討していく必要がある。

○環境経済部長 閉会挨拶

○閉会